慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ステーシィ・ メイ, ガロ・ プラザ共著『ラテン・ アメリカにおけるユーナイテッド・ フルーツ・ カンパニー』
Sub Title	Stacy May & Galo Plaza : The United Fruit Company in Latin America
Author	賀川, 俊彦(Kagawa, Toshihiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1964
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.37, No.5 (1964. 5) ,p.90- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19640515-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Stacy May and Galo Plaza:
The United Fruit Company in Latin America

National Planning Association, Washington, D. C., 1962, 263 pp.

ステーシィ・メイ
ガロ・プラサ共著

『ラテン・アメリカにおけるユーナイテッド・フルーツ・カンパニー』

一　昨今、「ユーナイテッド・フルーツ」の極東進出に関して、さまざまな臆測がなされている。バナナの有力市場である日本の場合、同社はこのほど大手八商社との間に「極東果実会社」(Far East Fruit Company) を設立し、中米産バナナの持ち込みに成功した。これは、従来の独占的な台湾ルートへの斬り込み作戦でもあつたわけだが、貿易自由化を目前に控えて、わが国バナナ業界にとつては、ちよつとした「スリル」であつたにちがいない。

だが、「ユーナイテッド・フルーツ」の存在は、ところ転ずれば

とても「スリル」などという呑気なものではなく、むしろ「スレート」(脅威) ですらある。中米、カリブ海沿岸のガテマラ、ホンデュラス、コスタ・リカ、パナマ、コロンビアの五ヵ国、それに南米のエクアドルを加えて計六ヵ国は「ユーナイテッド・フルーツ」の勢力圏であつて、同会社はこれら諸国のいずれにも広大なバナナ栽培園を抱えている。別名「バナナ帝国」と称されるこの一大私企業に対して、これら諸小国はそれぞれの政治不安と経済貧困のゆえにとても太刀打ちできない状態である。これまで、モノカルチャーに甘んじてきた低開発諸国においてその唯一の生産物であるバナナの栽培、輸送、販売のルート、すなわち耕地、鉄道、船舶、電信、電話などのすべても独占的に押えてきたこの巨大な「帝国」に対して、ナショナリズムの時流に乗つた騒動が起るのはむしろ自然の成り行きであるかも知れない。今日、「原住民労働者との契約」、「中米国際鉄道」、「ガテマラ革命」、「現地政府と会社との利権争い」などの問題が堆積しているが、およそ中米諸国の政治・経済と「ユーナイテッド・フルーツ」とは密接不可分な関係にある。

昨春、筆者はガテマラにて同支社を訪れ、種々の資料を入手したが、その中で同社の実態をもつとも克明に捉えているのが、ナショナル・プランニング・アソシエーションのケース・スタディの一つである本書である。本書は、同社の事業内容や経営内容を中心課題とする一種の企業診断書であるが、著者はまことに広大な視野から「ユーナイテッド・フルーツ」を観察し分析している。それは、「ユーナイテッド・フルーツ」自体が単なる私企業というにはあまりに

も雄大な構想を基にしているがためでもあろうが、著者は、同社の事業の沿革史から説き起し、世界的視野から同社の事業を検討、さらに地域的政治・経済・社会との関連における同社の功罪にまで批判的な眼を向けており、まことに巨視的にも微視的にも徹底した綜合的ケース・スタディの感が深い。筆者は、中米諸国の地域研究を推進する必要から本書を一読したのであるが、ここでは中米諸国の政治と「ユーナイテッド・フルーツ」の関連について、本書から得られる知識を紹介しておきたい。

二　はじめに、「ユーナイテッド・フルーツ」の形成について説明する必要があろう。一般に、バナナ貿易は、一八六六年、パナマ地峡の珍妙な熱帯果実としてバナナがコロンからニュー・ヨークへ持ち込まれたときに始まったとされている。一八七六年にフィラデルフィアで催された合衆国独立百年祭展示会では、銀紙に包まれたバナナが一本一〇セントで売られたという。この頃には、バナナはきわめて投機性の高い産業としてではあつたが、すでに交易されはじめていた。マサチューセッツの漁船長ベーカー（Lorenzo Dow Baker）が西インドのジャマイカからバナナをジャージイ・シティに輸送して成功を収めたのは一八七〇年のことであつた。かれは、その収益を資金としてスタンダード蒸気汽船会社を創設し、ジャマイカのバナナを米国各地に運んでは莫大な利益を収めていた。その頃、ボストンの果実商プレストン（Andrew Preston）は、バナナの売買を一手に引き受け、高いコミッションをとつて成功していた。このベーカーとプレストンの二人が結んで一八八五年に設立したのが「ボストン・フルーツ」（The Boston Fruit Company）であり、のちの「ユーナイテッド・フルーツ」の母体である。

一方、中米諸国に鉄道を経営し、中米の「鉄道王」と云われていたキース（Minor Keith）は、鉄道の赤字補塡のためにバナナ栽培に乗り出し、ニュー・オルリーンズに本部を置く熱帯貿易輸送会社（The Tropical Trading and Transport Company）を設立、これを中心にコロンビア土地会社（The Columbia Land Company）、シュナイデル・バナナ会社（The Snyder Banana Company）などを経営し、米国南部の市場を開拓していた。「ボストン・フルーツ」にキースの関係会社が一八九九年に合併してできたのが「ユーナイテッド・フルーツ」である。

創立当時の「ユーナイテッド・フルーツ」の資本金一一、二三〇、〇〇〇ドル、鉄道一一二マイル、土地二一二、三九四エーカー、その版図はすでにサント・ドミンゴ、ホンデュラス、ガテマラ、パナマ、キューバ、ニカラガ、ジャマイカ、コロンビアなどカリブ海一帯にまたがつており、この地域一帯のバナナ栽培、鉄道、船舶輸送などバナナ産業に繋がるすべてを独占していた。しかし、その後も同社は競争会社を次々に買収、吸収し、一九二九年にはホンデュラスに強固な地盤を有していた「キュアメル・フルーツ」（Cuyamel Fruit Company）を買収、資本金も二一五、〇〇〇、〇〇〇ドルと伸び、この年には世界バナナ総取扱量の六五%を「ユーナイテッド・フルーツ」一社で占めている。

第二次大戦中、バナナ業界は一時低調を嘆つたけれども戦後は再

び急速に活気を呈しはじめた。だが、戦後の景気には、ナショナリズムという副産物が伴つていた。もはや「帝国」主義は商業道徳上からも追放される運命にあつた。大戦後、海外に事業所をおく会社は、少くとも守勢に廻らねばならなかつた。中米、カリブ海圏に大半の資産をおく「ユーナイテッド・フルーツ」は、その典型であるといえよう。戦後の世界バナナ総取扱量は急激な伸びを示しているにもかかわらず、「ユーナイテッド・フルーツ」は横這い状態を示している。「同社はもはや新たな投資を行わず、むしろ政情不安な国からは撤退の準備をしている」とは、ガテマラ総支配人から筆者が直接聞き出したことどもの結論である。だが、ガテマラ革命のように、中米の小国では国家権力を動員しても動じないだけの実力を有する同社の沈黙は、まことに不気味ですらある。その中米での守勢が、極東での攻勢に向けられたと考えられはしないだろうか。

三　さて、「ユーナイテッド・フルーツ」の中米、カリブ海圏各国における現勢力はどのようなものであろうか。各国の政治・経済・社会との関連について、本書からは、次のようなことを学ぶことができる。

1　コスタ・リカ

コスタ・リカは中米でもつとも早くからバナナの栽培がはじめられたところである。一八七八年にはリモン―サン・ホセ間に鉄道が開通し、リモン港周辺に二五万エーカーの土地を有する「ユーナイテッド・フルーツ」はこの国のバナナ産業に関するすべての業種を独占していた。コスタ・リカ産バナナのうち同社の扱う割合は九九%に及ぶ。かくして、一九五五年度には同社の所有地は五〇万エーカー、同国総面積の四%に達している。

だが、バナナ栽培の大敵である「パナマ病」、「シンガトカ病」などが一部に蔓延したため、その地区ではカカオのような代替作物を栽培するようになつた。こうした病菌はバナナ園を一挙に廃園にしてしまうほど恐しいものであるが、代替作物の栽培は、この国をモノカルチャーから脱皮せしめるという皮肉な結果をもたらしている。

一方、コスタ・リカにおける一九五七年度の総国民所得三三九、〇〇〇、〇〇〇ドルに対し同社の年間所得は五六、八〇〇、〇〇〇ドルであつて前者の一六・九%を占め、この年間収入の二六%は米国へ吸収されている。もつとも、残る七四%は労働賃銀、物品資材の購入などのほか、同社の経営する病院、学校の経費としてコスタ・リカに還元されている。こうした数字は明らかに、この国の経済に占める「ユーナイテッド・フルーツ」の勢力の大きさを表わしており、同社のコスタ・リカ経済に対する功罪は別としても、この国の対外依存度はあまりにも大きいと云わなくてはならない。

それでは、コスタ・リカでは過度の対外依存から脱却すべく、何らかの策を施しているのか、と問いたくなる。だが、今日では、遺憾ながら政府の施策はつねに「ユーナイテッド・フルーツ」の後塵を拝するのみであつて、効果的な何らの策をもとりえない現状にある。かりに、ナショナリズムの潮流に乗じて「ユーナイテッド・フルーツ」を駆逐したところで、結果的に打撃を受けるのは自国政府なのであるから……。それほど、この国では、同社は深く根ざして

いるのである。

2　ガテマラ

一九三六年には「中米国際鉄道」の利権争い、一九四五―五四年の「ガテマラ革命」と、この国は政治的に問題の多いところである。そして、こうした騒動には必らず「ユーナイテッド・フルーツ」が一枚加えられているのが実情である。だが、同社がこの国の政争問題として特に矢面に立つほど、経済的には目立つた実績を挙げていないことは、むしろ不思議なほどである。

一九五七年度における輸出割合は、コーヒー七二%、それに対してバナナは一三%にすぎず総国民所得五六二、〇〇〇、〇〇〇ドルに対して同会社の収益は二〇、九〇〇、〇〇〇ドルとその割合は約四%にすぎない。この数字は、パナマ、ホンデュラス、コスタ・リカの一〇―一六%に比すれば1/3ないし1/4にすぎない。

こうした数字の示すように、ガテマラにおける同社の経済的地位は、政治的接触から感じられるほどに高くはない。にもかかわらず、ガテマラヤン・ナショナリズムの矢面に立たせられているのは何故であろうか。かつて、「ユーナイテッド・フルーツ」に買収された「キュアメル・フルーツ」の設立者サムエル・ゼムリー（Samuel Zemurray）は「バナナ生産国のために最善なること、それが会社にとつても最善なことである」と説いているが、ガテマラでの「ユーナイテッド・フルーツ」はこうした精神にはかなり欠けていたようである。原地人の反感、これがガテマラでの同社の立場を苦しめているように思われる。

3　ホンデュラス

「ユーナイテッド・フルーツ」の海外生産地で、もつともうまくその出先国と接触を保つているのはホンデュラスであろう。この国の経済に示す同社の地位はかなり高く、総国民所得二九八、〇〇〇、〇〇〇ドルに対して同社の年間総収入二七、三〇〇、〇〇〇ドルとその約九%を占めている。同社はこの国ではかなりの収入実績を挙げているが、その全額が国内支出に振り向けられており、米国本土への吸収はない。それというのも、ホンデュラスに地盤をもつていたサムエル・ゼムリーの精神が、今日になつて「ユーナイテッド・フルーツ」の幹部に理解されたからであろうか。あるいは政治的不安の少いこの国の将来性を見込んでのことであろうか。とにかく、この国での収益のすべては、病院・学校・研究所などの維持費、バナナ園の拡充ないし近代化、その他の設備費として惜しげもなく注ぎ込まれている。

ホンデュラスにおける民意はきわめて低い。だが、「キュアメル・フルーツ」を買収した「ユーナイテッド・フルーツ」が前者の経営方針を継いで、この国には精神的にも物質的にも奉仕と誠意をもつて貫いていることが民間に理解されているようである。かつて、ほとんどの住民が吸血病に悩み、作物はイナゴの大群に荒され放題であつた湿地帯でも、「ユーナイテッド・フルーツ」は徹底的な給排水設備を施して衛生的なモデル地区に変えてしまつた。こうした経済的、社会的貢献が、政治面にも率直に反映されるものであることを、この国は明白に教えている。

4　パナマ

パナマの経済は、運河収入を除けば、ほとんどをバナナに頼りきつた感じである。この国の輸出品目中、バナナの占めている割合は七四%、そのバナナ輸出額の九三%を「ユーナイテッド・フルーツ」が扱つている。これはパナマ総輸出量の六九%に当る。したがつて、総国民所得に対して同社収益の示す割合もきわめて大きく、前者の二四六、〇〇〇、〇〇〇ドル中、後者は四三、三〇〇、〇〇〇ドルとその一七・六%を占めている。

この国の経済に占める同社の重要性にもまして注目すべきは、同社が利益配当金として米本土へ吸収する割合である。この吸収額は一五、〇〇〇、〇〇〇ドルであつて、同社の海外生産地としては最高の収益である。このことは会社自体にとつて実に満足すべきことであろう。だが、パナマ国側にとつては甚だ不満なことにちがいない。

最近のパナマにおける政情は、まことに不穏である。だが、「騒動の直接原因が運河問題にあれ、間接的には——経済的には——「ユーナイテッド・フルーツ」に対する民衆の反感がその底流にあると思われる。ただし、パナマ経済の同社に対する依存度があまりに高く、もし「ユーナイテッド・フルーツ」がパナマから引き揚げでもしたら同国経済は一たまりもないので、政治問題として表面的に運河が槍玉に上つているものと考えられるのである。ナショナリズムの急激に高まつてきたパナマでは、かりに運河問題がパナマに有利に解決された暁には、つぎに「ユーナイテッド・フルーツ」が矢面に立つことは必定と思われる。

5　コロンビア

コロンビアはコーヒー国である。コーヒーはこの国の総輸出額の八四%を占めており、バナナは僅か四%を示すにすぎない。バナナ輸出額中「ユーナイテッド・フルーツ」の扱う量は五八%ではあつても、総輸出額中に占める同社の扱い高は僅々二%にすぎない。総国民所得に占める同社の収入もまた〇・八%と微々たるものである。しかも、この国の鉄道はすべて国有であつて、さきに挙げた四ヵ国のように立体的な経営方式をとることができない。同社の取り扱う輸出バナナも、その大部分は個人栽培者からの買付けによる。したがつて、この国における「ユーナイテッド・フルーツ」は企業というよりも商社的な存在にすぎない。

このように、コロンビアにおける「ユーナイテッド・フルーツ」は他の海外生産地とはまつたく違つた経営方式をとつているし、また企業形態も異なる。同社にとつて、コロンビアはいわば苦手な国のようである。だが、同社の収支決算によると、その総収入の一七%に当る二、五〇〇、〇〇〇ドルは利益配当金として米国に持ち帰られている。この数字は、パナマの一五、〇〇〇、〇〇〇ドルにはとても及ばぬとしても、政治的ギャンブルを冒してまで収益の挙がらぬ他国に較べるならば、商社的経営方式の方がずつと有利であり、かつ安全であることを示していると云えよう。

コロンビアは前記四ヵ国に比してずつと大国であり、政治的経済的にも安定している。したがつて、「ユーナイテッド・フルーツ」としても迂闊なことはできない。ときに、個人栽培者との間に契約条

件に関する小競合は起つても、同社が政治問題として騒がれるようなことは、今日のような経営方式をとるかぎり、まずないものと云うことができよう。

6　エクアドル

エクアドルは世界有数のバナナ輸出国である。しかし、これはかつてココア栽培のみに頼るモノカルチュアを脱するために講じられた対策が、近年になつて漸く実つてきたものである。一九五五年の同国総輸出額中、バナナの占める割合は五五%、その後もますます増えているが、エクアドルの経済にとつてはそれだけ余裕を増すことになる。

「ユーナイテッド・フルーツ」が同国での操業を開始したのも、したがつて他国との場合に比してずつと遅く一九三〇年代に入つてからのことである。また経営方式もコロンビアの場合のように個人栽培者からの買付けによる商社方式であるが、取り扱い量は年々増大する一方であり、収益も大きい。この国の総国民所得五九〇、〇〇〇、〇〇〇ドルに対して同社収入は一五、〇〇〇、〇〇〇ドルと二・六%を占めているが、その割には米国への吸収率は高く、利益配当金として三、六〇〇、〇〇〇ドルと高収益率を示している。

エクアドルにおける「ユーナイテッド・フルーツ」は、多少の個人栽培者との契約問題とそれにからまる競争会社との軋轢を除けば、政治的接触関係はきわめて友好的である。ただし、エクアドル産バナナが他国のものに比して一般に味が悪く、こうした栽培技術上の問題だけが同社の唯一の悩みのようである。

四　以上、「ユーナイテッド・フルーツ」の海外における企業実態を生産地別に一巡したが、このように見ただけでも将来の同社の経営方針として何が有利であるかを知ることができよう。

一方、生産地側からしても、ホンデュラスの場合を除けば、同社が企業独占ないし立体的帝国主義的企業形態をとるかぎり政治的軋轢を免れることはできないように思われる。ホンデュラスの場合、「ユーナイテッド・フルーツ」はこの国に同化しようと努めているように見られるし、じつさい、この国においても同社の必要性は高く評価されているようである。しかし、ブリティッシュ・ホンデュラスにすでに波及しているようなナショナリズムの嵐が、いつ、どのような形でこの国に出現するかという問題が残されている。その場合、サムエル・ゼムリーの精神が現地人の興奮をどこまで押えることができるだろうか。東西両陣営間に後進国開発ないし技術援助競争が激化されている今日、われわれは自由陣営の一員として、これを単なる興味をもつて傍観してはいられない。

後進国の開発あるいは技術援助の面で、「ユーナイテッド・フルーツ」のこれまでに果してきた役割は大きい。それが結局は会社の収益に好影響がある場合に限られていたとしても、少くとも未開地の開発、無教育な現地人の啓発、さらにその地方における経済的開発など、無から有へ、そして未開社会を文明社会に導くなど、数多くの貢献がなされているはずである。だが、今日、特に文明の立ち遅れた諸国では理性の通用せぬ場合が多い。人間の誠意なるものが、未開の現地人にどこまで訴えることができるものかということ

であろう。

地域研究とは、従来の縦割りの学問体系を横に裁とうとするものである。したがつて、そこには抵抗も多いし無理を生ずることもあろう。しかし、地域社会では、特に同時限的には横の連繋がきわめて強い。本書は一私企業の調査報告であるが、前述したような地域的小国ではその企業体が政治的にも強い連関性をもつものであることを痛切に感じさせる。逆の立場から云えば、地域研究にはまずこのような調査資料が必要にして不可欠だ、ということである。その意味で、本書は調査資料としては無論のこと、地域研究にとつて役立つ数多くの示唆を与えるものとして、高く評価されるであろう。

（賀川俊彦）

Louis I. Bredvold: The Brave New World of the Enlightenment

Ann Arbor, The University of Michigan Press, 1961, 164 pp.

ルイス・I・ブレドヴォルド著

『啓蒙主義のすばらしい新世界』

novus ordo saeclorum を思想によつて造型化しようとする不断の努力は、十七・八世紀の啓蒙主義者たちに共通したものである。啓蒙主義の時代は、まさにヨーロッパが中世的世界から離脱し、いわゆる近代精神を確立しつつあつたときである。この時代の思想家は、徹底的に人間＝自然を探究し、それに基づいて社会・道徳・制度を構築しようと試みていたのである。「ラディカルということは、ものごとを根本からつかむということである。だが人間にとつての根本は、人間そのものである」（『ヘーゲル法哲学批判』）とは、マルクスの有名な言葉であるが、むろんその把握の仕方に相違のあることは当然のこととしても、われわれは、旧い確信から人間そのものを解放しようとする点に、啓蒙主義にラディカルなものを感ぜざるを得ない。当時の時代精神は、ブレドヴォルドが表現しているように、まさに The Brave New World（シェクスピアの言葉）であつた。

言うまでもなく、この言葉にはなかば風刺の意味がこめられている。現代の時点からみると、啓蒙主義思想は、野放図なデーモンにとり憑かれたかのごとく、ヨーロッパを気狂いじみた冒険に曝してゆき、このところに、思想の政治的現実化のもたらす悲劇性をわれわれはまざまざとみせつけられる思いがする。啓蒙主義の異常なエネルギー、その否定的情熱のほとばしりは、たしかに美しい花ではあつたが、それゆえに狂い咲いた花々でもあつたのである。われわれは、当時の群がつた諸思想をただちに眺めていることはできない。それらは、われわれ自身の思想状況を規定しており、われわれ自身の問題として把えなおさなければならないばかりか、その意味では、ふたたび立ち戻らなくてはならない現代の出発点なのであ